ファシズム期イタリアにおける「第二未来派」
―「航空絵画」を中心に―

千葉大学 太田 岳人
OHTA Taketo

1909 年、フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ（1876～1944）が発表した「未来派創立宣言」によって開始された未来派運動は、狭義の美術の枠を越えあらゆる文化領域への浸透を試みた 20 世紀最初のアヴァンギャルド運動である。その一方で、第一次世界大戦後にベニート・ムッソリーニ（1883～1945）率いるファシズム勢力に接近した事実によっても知られている。そのため、第二次世界大戦直後から 1970 年代までは、1910 年代の未来派のめざましい成果や国際的影響力の強さが評価される一方、運動自体はマリネッティが死去するまでイタリアで継続したにも関わらず、若い世代の芸術家をも吸収しつつ 1920 年代から展開された「第二未来派（second futurismo）」の潮流については、その重要性を早くから主張したクリスポルティら少数の批評家を除き、紹介や研究が停滞していた。しかし最近の四半世紀でこの傾向は大きく変化し、例えば 1986 年のヴェネツィアや 2001 年のローマで開かれた未来派の回顧展は、1920 年代から 30 年代の造形活動をも広く取り上げた綜合的な展望を示すに至っている。またファシズム期の文化に顕著なモダニズムの要素について、「第二未来派」の活動研究をも視野に含めつつ解釈する先鋭的な試みも見られる。

本発表で対象とするのは、1930 年代に「第二未来派」が提唱した「航空絵画（aeropittura）」の理念と実際の作品である。1931 年、近代文明の産物である飛行機による航空体験がもたらす、心身の感覚の変容に着目して表現する事の重要性を謳った「航空絵画宣言」が、「第二未来派」の 9 人による連署で発表される。それ以降、「航空」を冠した各ジャンルに渡る未来派の活動（絵画・彫刻・詩・舞踏など）は、運動の終焉に至るまで積極的に展開される事になる。また、この「航空絵画宣言」の原形となる文書「飛行と航空絵画のパースペクティヴ」が発表された 1929 年は、ファシズム政権の設立したイタリア学士院にマリネッティが入会するとともに、ファシズム政権とローマ教皇庁との間にラテラーノ協約が結ばれており、政治史家デ＝フェリーチェによれば「同意の時代」、すなわちエチオピア戦争（1935～36 年）に至るまでの間、ファシズムが最も大衆の積極的な支持を引き出す事に成功する一時期の始まりでもあった。

発表者は、この「同意の時代」における「航空絵画」の表現について、同時期の西欧大衆文化において飛行に関するイメージが広く愛好されていた事実と、そのようなイメージをファシズム勢力が、新しい政治を担う自らの表象として取り入れて行く経緯を検討する。その上で、未来派運動の展開、大衆文化、そしてファシズム政権の相互関係を分析し、現在の日本の未来派紹介において大きく欠落している「第二未来派」について考察を行う。